

「は？」

思わず出てしまった。思いの外苛立ったトーンで。

收拾がつかなくなって「まさかお前、話ってそれ？」と精一杯、船山の阿保な顔をしながら
言ってみる。ルマンドはチラッと俺の顔を見たまま無視して話を続ける。ツッコむとこだろ。

「そやで。まあまあ、話したかったのはこっからやねん。」

またしても例の意味ありげな顔をしている。この顔が妙にむかつく。

「ああ海よ ああ海よ ああ海よ」

ルマンドはここにくる前に何杯か引っ掛けてきたのだろうか。うっとりとした顔で船山の川柳
を詠む。お前の川柳か。

「ピュアやな。純粋やなって。」

同じこと二回言うなと思ったが、ツッコミ待ちではなさそうだ。

そして得意げな顔で続けた。

「船山もさ、何ちゅうか子どもっぽいとこあったやん。だから不良なんかやってたんやろけど。
せやから、その子どもっぽさちゅうか純粋な心ちゅうか、その生感みたいなもんが評価さ
れたんかなって。それ話したなってもうて。」

「そやな。」

不意に発せられたエセ関西弁はルマンドが発したのかと思いたかったが、どうやら俺のよ
うだ。

ルマンドは気付いてない様子だったが、あまりの恥ずかしさに俺は俯いた顔を上げられな
かった。

「お待たせしました。」と佐々木さんに似た店員がテーブルにコーヒーを置く。

ルマンドは勢いよく砂糖の袋を千切り、サーっと砂糖がドブ水に落ちていく。

二本目の砂糖に手をかけた時、俺は俯いたまま言った。

「砂糖、くんない？」

